



横澤 一彦 (人文社会系研究科教授 心理学)

自分と同世代だった、働き盛りのアメリカ人2人の死について書いてみたい。2人の共通点は、先端技術に関わる顕著な業績を挙げた点であり、その死がいずれも米国でたいへん話題になったので、ご存知の方も多いと思う。死に至るまでの発信力の強さから、日本人と異なる死生観を感じるかもしれない。ただ、ここでそういう比較をするつもりはなく、自分にとってのヒーロー達に捧げる挽歌という位置づけになるのかもしれない。

その1人、スティーヴ・ジョブズが2011年10月5日に亡くなった。アップルCEOを退任してから1ヶ月余り、誰もが覚悟していた瞬間だったのに、それが意外に早く訪れてしまった。訃報が伝わると、これまでのアップル新製品発表時の伝説的プレゼンや、“Stay hungry, stay foolish! (食欲であれ、愚直であれ)”を繰り返して結ぶスタンフォード大学の卒業式での挨拶が、多くの方の目に触れた。Walter Isaacsonによる評伝“Steve Jobs”は、10月に発売されたのに、全米年間売り上げ1位になったそうだ(翻訳本もすぐに発売されている)。

間違いなく、同世代のヒーローだった。もちろん、会ったこともない。ただ、25年以上、彼が世の中に提供した製品に手を触れなかった日はなかったかもしれない。それほどのマックフリークだ。研究室の片隅には、学生がマック・ミュージアムと呼ぶ、大きな物品棚があり、これまでに研究で使用した歴代マックが並んでいる。改めてそれらを眺めると、同時代を少なくとも四半世紀生きてきたという感慨はある。

ジョブズは、もし今日が人生の最後の日であると考えれば、これからやることは、その最後の日に値するかと問いかける。もしも違うのであれば、生活の何かを変える時だと言う。確かに、社会から求められている仕事であっても、最後の日に値しないと思われる仕事に時間を費やすことが多くなっているが、仕方ないと自分を納得させてしまう。誰もがジョブズのようにわがままには生きられないだろう。ただ、最後の日でも可能ならば、講義はしていたいし、きっと研究テーマについて議論していたと思う。

その最後の講義について、お手本がある。カーネギーメロン大学教授だったランディ・パウシュの講義である。2007年9月18日に行われた講義の様子は、今でも動画サイトで見られるが、自分の肝臓に10個の癌が転移している撮

像結果を提示し、余命3～6ヶ月であることを伝えることから始まる。ただ、深刻な語り口は一切なく、あくまで明るく、彼の専門であるバーチャル・リアリティの話はほんのわずかで、内容の大半は子供の頃からの夢を叶えようとするこの大切さについてである(なぜ、そのようなテーマを選んだかは、講義の最後に明かされる)。夢を叶える道のりに障害が立ちはだかったとき、壁の向こうにある何かを自分がどれほど真剣に望んでいるかを証明するチャンスだと自分に言い聞かせてきたという。この講義に関わる書籍“The Last Lecture”(邦訳『最後の授業 ぼくの命があるうちに』)も発刊され、全米でベストセラーになったが、2008年7月25日に帰らぬ人となった。47歳だった。ただ、最後の講義で彼が語った余命より長く生きてくれたことが救いである。

限られた余命を充実させて生きる感動物語を一般的アメリカ人が好むことは明らかだが、この2人には特に、子供の心を捨てないまま大人になったような人間を許容する米国の理想を見るのではないかと思う。自分にとっても彼らがヒーローに映るのは、自分自身が相当アメリカ人的な性向を持っていることになるのだろう。確かに、米国に滞在しているときは生き生きしていると学生に揶揄され、見透かされているようで悔しいが、的を射ている。文学部のように懐の広い仕事場でも、時に日本的規範が窮屈なのである。

カーネギーメロン大学では、「もし死ぬことが分かっていたら」という仮定のもとに行われる講義シリーズがあるという。あくまで仮定だというのが、パウシュの講義も、そのシリーズの1つである。さて、自分の最後の講義なら、どのようなテーマを選ぶか考えてみたが、近々「死ぬことが分かる」までは、思い浮かびそうもない。ただ、先端的な科学研究に携わるときに、理想を求め、夢を描くことが重要に違いない。ところが、答えが出る事が分かっている場合にしか、行動しようとする学生が多いと感じるのは、すでに自分も相当年を取った証拠なのだろうか。確かに、同世代で共に頑張ってきた仲間の死に接する機会も増え、その無念さを思わずにいられない。それならばなおさら、パウシュの講義を見習って、自分の最後の講義でも、理想を求め、夢を描こうと叫ぶ責任があるのかもしれない。